



# ベートーヴェン小噺



## — 室内楽編 —

ハイドンに弟子入りするため、ドイツの片田舎ボンからはるばるウィーンに出てきたベートーヴェン。社交界にも出入りするなか、ある日、リヒノフスキー侯爵邸で、素晴らしいヴァイオリニスト、イグナーツ・シュパンツィヒと知り合う。彼の率いる弦楽四重奏団はすばらしく、その友情と音楽的刺激から、多くの宝物のような弦楽四重奏曲が生まれた。この団体は、何度かメンバーを変えながら、のちにラズモフスキー伯爵邸のお抱え弦楽四重奏団となり、これが史上初のプロ弦楽四重奏団と言われている。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲は一筋縄ではいかない難曲ばかりだった。シュパンツィヒが「ヴァイオリンの限界を超えている」と不平を言ったとき、ベートーヴェンは「音楽の精霊が語りかけてくるときに、君のあわれなヴァイオリンのことを考えているか」と言ったそうだ。



### 内藤 晃

ピアニスト、指揮者、作編曲家

月刊音楽現代にコラム「名曲の向こう側」を連載。楽譜やCDの解説多数。フランツ・リストのマスタークラスの記録を翻訳出版予定。音楽の奥深さや新しい楽しみ方をみなさんと共有したいと願っています。

Twitter@Akira0404

5月30日の文化茶話では、今年度のテーマであるベートーヴェンについてお話しいただく予定でしたが、残念ながら公演中止となりました。そこで、出演予定だった内藤さんに5回に渡りベートーヴェンにまつわる小噺を寄稿していただくこととなりました。1回目は、7月の公演にちなみ室内楽編です。どうぞお楽しみください。

そんなシュパンツィヒはメタボでどんどん太っていき、ベートーヴェンはデブを讀めるふざけた合唱曲「Schuppanzigh ist ein Lump シュパンツィヒはろくでなし」WoO100をプレゼントしている。2人の仲の良



シュパンツィヒ

さがにじみ出ている微笑ましい。ベートーヴェンの弟子ツェルニーいわく、「シュパンツィヒ以上にベートーヴェンの音楽の根底に立ち入ることのできた音楽家はいないだろう」。

今回は、生誕250周年にちなんだ小噺をご紹介します。

## おすすめCD



### ベートーヴェン

ピアノ三重奏曲第7番「大公」/他  
(ティボー/カザルス/コルトー)



まず何をおいてもコルトー(p)ティボー(vn)カザルス(vc)による《大公》トリオ(1928年)を。融通無碍な音の対話の妙に心のひだが震えっぱなしである。弦楽四重奏は、1950年代のバリリ四重奏団の録音。往年のウィーンフィルの名手たちが自然体で紡ぎ出す楽興の時は、純度の高い室内楽の喜びを教えてくれる。